身体図式、身体像の発達を促す運動遊びとその評価指標の検討
-「ハシゴ渡り」と感覚運動面のアセスメントー

和久田佳代*
聖隷クリストファー大学

目的

子どもの体力低下や発達が気になる子の増加が指摘される現状において、幼児の運動発達をどのように評価していくかは重要な課題である。「ハシゴ渡り（ハシゴを高這いで渡る)」の際の渡り方に幼児の身体図式、身体像（ボディイメージ）が表出していると考え、「ハシゴ渡り」の評価指標を検討し、作業療法分野で活用されている感覚面、運動面のアセスメントを同時に行い、幼児の身体図式、身体像や協調運動の発達に関する知見を得る。

方法

１）2020年度に協力園において実施した3～5歳児の「ハシゴ渡り」を分析し、「ハシゴ渡り」の評価指標を再検討した。

２）2021年10月に協力園の4,5歳児クラスの体力測定、「ハシゴ渡り」及び「日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査簡易版（S-JMAP）」の「片足立ち」「背臥位屈曲」を実施した。同時に「SP感覚プロファイル短縮版（SSP）」を保護者に配布し、回答を得た。

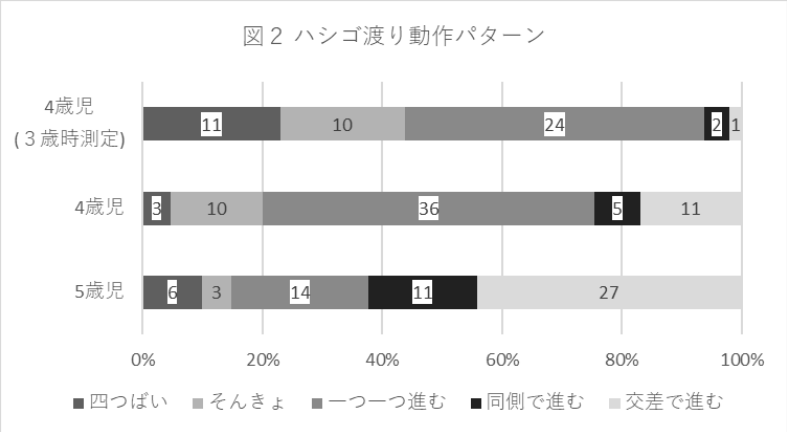
結果

１)ハシゴ渡りの動作分析から、図１のようにハシゴ渡りの評価指標(案)を作成し、分析した。

２）４歳児 65 名、５歳児 61 名のハシゴ渡りの動作パターンを図２に示した。

図１　ハシゴ渡りの評価指標（試案）

動作パターン		キー動作カテゴリー（特徴）			
		腕	脚	四肢協調	目線
１四つばい			膝をつく		
２そんきょ		腕に体重をかけない	膝が屈曲したまま		手と足
高ばい	３一つ一つ			一つ一つ進む	
	４同側			同側で進む	前と手
	５交差			交差で進む	前



考察

４歳児クラスは、2020 年 12 月(1 年前)に測定した 3 歳時点の測定と比較すると、四つばいで渡る幼児が減り、交差で渡る幼児が増えていた。5 歳児クラスでは交差で渡る幼児がさらに多かった。(図 2) このように動作パターンは 1 から 5 へと発達していくと考えられ、評価指標(案)の動作パターンは妥当性があり、発達評価につながると考えられた。

課題

１）評価指標の信頼性、妥当性を確認し、感覚運動面のアセスメントとの関連性の分析を進めていく。また、この研究をパイロットスタディとして、対象園を広げてハシゴ渡り評価を実施していく。

２）４歳児について、縦断的にデータをとっていくために、年１回以上の測定を継続する。